

雪の日

樋口一葉

青空文庫

見渡すかぎり地は銀沙を敷きて、舞ふや蝴蝶(こてふ)の羽(は)そで軽く、枯木も春の六(りくくわ)花の
 眺めを、世にある人は歌にも詠み詩にも作り、月花に並べて称(たた)ゆらん浦(うらやま)山(やま)しさよ、あ
 はれ忘れがたき昔しを思へば、降りに降る雪くちをししく悲しく、悔(くい)の八(やちたひ)千度その甲斐も
 なけれど、勿(もつたい)躰(みはか)なや父祖累代墳墓(みはか)の地を捨て、養育の恩ふかき伯母君にも背(そむ)き、我
 が名の珠に恥かしき今日(けふ)、親は瑕(きず)なかれとこそ名づけ給ひけめ、瓦に劣る世を経(へ)よとは思
 しも置かじを、そもや谷川の水おちて流がれて、清からぬ身に成り終りし、其(その)あやまちは
 幼(おさなき)氣の、迷ひは我れか、媒(なかだち)は過ぎし雪の日ぞかし。

我が故郷は某の山里、草ぶかき小村なり、我が薄井(うすゐ)の家は土地に聞えし名家にて、身は
 其(その)一つぶもの成りしも、不幸は父母はやく亡(う)せて、他家(ほか)に嫁(よめ)ぎし伯母の是れも良(をうと)人を
 失なひたるが、立歸りて我をば生(おほ)したて給ひにき、さりながら三歳といふより手しほに懸
 け給へば、我れを見ること真実(まこと)の子の如く、蝶花の愛親(おや)といふ共(とも)これには過ぎまじく、七
 歳よりぞ手習ひ学問の師を撰(え)らみて、糸(いと)竹(たけ)の芸は御身(ごみ)づから心を尽くし給ひき。扱(さて)も
 たつ年に関守なく、腰揚(あけ)とれて細眉(こまゆ)つくり、幅(あ)びろの帯うれしと締(し)めしも、今にして思へ
 ば其頃の愚かさ、都乙女の利(く)発には比(くら)ぶべくも非らず、姿ばかりは年齢ほどに延(のび)びたれ

ど、男女の差別なきばかり幼なくて、何ごとの憂きもなく思慮もなく明し暮らす十五の冬、我れさへ知らぬ心の色を何^(いづこ)方の誰れか見とめけん、吹く風つたへて伯母君の耳にも入りしは、これや生れて初めての、仇^(あだな)名ぐさ恋すてふ風説なりけり。

世^(あやまり)は誤の世なるかも、無き名とり川波かけ衣、ぬれにし袖の相手といふは、桂木一郎とて我が通学せし学校の師なり、東京の人なりとて容貌^(みめ)うるはしく、心やさしければ生徒なつきて、桂木先生と誰れも褒めしが、下宿は十町ばかり我が家の北に、法正寺と呼ぶ寺の離室^(はなれ)を仮^(かり)ずみなりけり、幼なきより教へを受くれば、習^(ならはし)慣うせがたく我を愛し給ふことに越えて、折ふしは我が家をも訪ひ又下宿にも伴なひて、おもしろき物がたりの中に様々教へを含くめつ、さながら妹の如くもてなし給へば、同^(はらから)胞なき身の我れも嬉しく、学校にての肩身も広かりしが、今はた思へば実^(げ)に人目には怪しかりけん、よしや二人が心は行^(ゆくみづ)水の色なくとも、結^(ゆ)ふや嶋田鬻^(こども)これも小児ならぬに、師は三十に三つあまり、七歳にしてと書物の上には学びたるを、忘れ忘られて睦みけん愚かさ。

見る目は人の咎^(とが)にして、有るまじき事と思ひながらも、立ちし浮名の消ゆる時なくば、可惜^(あたら)白玉の瑕^(きず)に成りて、其身一生の不幸のみか、あれ見よ伯母そだてにて投げやりなれば、薄井の娘が不品行^(ふしだら)さ、両親あれば彼の様^(あ)にも成らじ物と、云ひたきは人の口ぞかし、思ふ

も涙は其方そちが母、臨終いまはの枕に我れを拜がみて。姉様ねがひお願は珠が事をと。幽かすかに言ひし一言
 あはれ千万無量の思ひを籠めて、まこと闇路に迷ひぬべき事なるを、引受けし我れ其甲そのか
ひ斐もなく、世の嗤ものわらひ笑に為しも終らば、第一は亡き妹に対し我が薄井の家名に対し、
 伯母が身そもそは抑も何とすべき。と御声ひく、四壁あたりを憚りて、口数すくなき伯母君が思し合は
 することありてか、しみじみと諭さとし給ひき、我れ初めは一ひたすら向夢の様に迷ひて何ごとくも
 思ひ分かざりしが、漸々やうやう伯母君の詞するどく。よく聞けよお珠、桂木様は其方を愛で
 給ふならん、其方も又慕はしかるべし、されども此処きまりに法ありて、我が薄井の家には昔し
 より他郷の人と縁を組まず、況ましてや如何に学問は長じ給ふとも、桂木様は何者の子何者の
 種とも知らぬを、門閥いゑがら家なる我が薄井の聳とも言ひがたく嫁にも遣りがたし、よし恋にて
 も然しかぞかし、無き名なりせば猶なほさらのこと、今よりは構へて往ゆき来もし給ふな、稽古
 もいらぬ事なり、其方大切なればこそお師匠様と追ついで従しよもしたれ、益えきも無き他人を珍
 重には非らず、年としごころ来美事に育だて上げて、人にも褒められ我れも誇りし物を、口惜しき
ぬぎぬ濡れ衣きせられしは彼かの人ゆゑなり、今までは今までとして、以これより来は断然ふつりと行ひを改
 ため、其方が名をも雪そそぎ我が心をも安めくれよ、兎角とかくに其方が仇は彼の人なれば、家
 を思ひ伯母を思はゞ、桂木とも思すな一郎とも思すな、彼の門かどすぎる共寄ともり給ふな。と畳

みかけて仰(おほ)する時我が腸(はらわた)は断(た)ゆる斗(ばかり)に成りて、何の涙(なみだ)ぞ睡(まぶた)に堪(た)へがたく、袖(そで)につゝみて音(ね)に泣(な)きしや幾(いくとき)時(とき)。

口惜(くせき)しかりしなり其内心(こころ)の、いかに世の人とり沙汰(さた)うるさく一村(いそ)挙(こぞ)りて我れを捨(す)つるとも、育(そだ)て給(たま)ひし伯母君(おばあさま)の眼(まなこ)に我が清濁(けいじやく)は見ゆらんものを、汚(けが)れたりと思(おも)す恨(うらみ)らめしの御詞(ごことば)、師(うし)の君(きみ)とても昨日(けふ)今日の交(まじ)りならねば、正(ただ)しき品行(へいぎん)は御覽(ごらん)じ知る筈(はず)を、誰(たれ)が讒(ざかしら)言(ことば)に動(うご)かされてか打捨(うてす)て給(たま)ふ情(なさ)なさよ、成(な)らば此胸(こころ)かきさばきても身の潔白(けつぱく)の頭(あたま)はしたやと哭(な)きしが、其心(こころ)の底何者(そこは何)の潜(ひそ)みけん、駒(こま)の狂(くる)ひに手綱(てづな)の術(すべ)も知らざりしなり。

小簾(をす)のすきかげ隔(へ)てといへば、一重(ひとへ)ばかりも疾(や)ましきを、此処(こゝ)十町(じゅうちやう)の間に人目(ひとめ)の関(せき)きびしく成(な)れば、頃(ころ)は木がらしの風(かぜ)に付けても、散(ち)りかふ紅葉(もみぢ)のさま浦山(うらやま)しく、行くは何処(どこ)までと遠(とほ)く詠(な)むれば、見ゆる森(もり)かげ我(われ)を招(まね)くかも、彼の村外(むらそと)れは師(うし)の君(きみ)のと、住居(すまひ)のさま面(おもて)かげに浮(う)かんで、夕暮(ゆふぐ)ひゞく法正寺(ほっしょうじ)の鐘(かね)の音(ね)かなしく、さしも心(こころ)は空(そら)に通(とほ)へど流(なが)石(いし)に戒(いま)しめ重(おも)ければ、足(あし)は其方(そのかた)に向けも得(え)せず、せめては師(うし)の君(きみ)訪(ま)ひ来(き)ませと待(まち)てど、立つ名(な)は此処(こゝ)にのみならで、憚(おどろ)りあればにや音(おとづれ)信(しん)もなく、と絶(た)えし中に千秋(ちゅうしゅう)を重ねて、万(よろづよ)代(よ)いわふ新(あらたま)玉(たま)の、歳(とし)たちかへつて七日(ななひ)の日来(きた)りき、伯母君(おばあさま)は隣村(りんむら)の親族(しんぞく)がり年始(としはじめ)の礼(れい)にと趣(おも)き給(たま)ひしが、朝(あ)より曇(曇)り勝(か)の空(そら)いや暗(くら)らく成(な)るまゝに、吹(ふ)く風(かぜ)絶(た)へたれど寒(ふ)さ

骨にしみて、引入るばかり物心ぼそく不^(ふと)図ながむる空に白き物ちらく、扱^(さて)こそ雪に成りぬるなれ、伯母様さぞや寒からんと炬^(こたつ)燧^(たき)のもとに思ひやれば、いとど降る雪用^(ようし)捨^(や)なく綿をなげて、時の間に隠くれけり庭も籬^(まがき)も、我が肘^(ひぢ)かけ窓ほそく開らけば一目に見ゆる裏の耕地の、田もかくれぬ畑もかくれぬ、日毎に眺むる彼の森も空と同一^(ひとつ)の色に成りぬ、あゝ師の君はと是れや抑^(そもそも)々まよひなりけり。

禍^(わざはひ)ひの神といふ者もしあらば、正^(まこと)しく我身さそはれしなり、此時の心何を思ひけん、善^(よし)とも知らず悪^(あ)しとも知らず、唯懐かしの念に迫まられて身は前後無差別に、免^(の)がれ出^(いで)しなり薄井の家を。

是れや名残と思はねば馴れし軒ばを見も返へらず、心いそぎて庭口を出^(いで)しに、嬢様この雪^(ゆき)ふりに何処^(いどこ)へとて、お傘をも持たずにかと驚ろかせしは、作男の平助とて老^(まめやか)実に愚かなる男なりし、伯母様のお迎ひにと偽れば、否や今宵はお泊りなるべし、是非お迎ひにとならば老僕^(おやぢ)が参らん、先待^(まづ)給へと止めらるゝ憎^(にく)き、真^(まこと)実は此雪に宜^(よ)くこそと賞められたく、是非に我が身行きたければ、其方は知らぬ顔にて居よかしと言ふに、取^(とり)しめなく高笑ひして、お子達は扱^(さて)らちも無きもの、さらば傘を持給へとて、其身の持ちしを我れに渡しつ、転ろばぬ様に行き給へと言ひけり、由^(ゆかり)縁あれば武蔵野の原こひしきならひ、此一

言さへ思ひ出らるゝを、無情かりしも我が為、厳しかりしも我が為、未宜かれとて尽くし給ひしを、思ふも勿躰なきは伯母君のことなり。

斯くまでに師は恋しかりしかど、夢さら此人を良人と呼びて、共に他郷の地を踏まんとは、かけても思ひ寄らざりしを、行方なしや迷ひ、窓の呉竹ふる雪に心下折れて我れも人も、罪は誠の罪に成りぬ、我が故郷を離れしも我が伯母君を捨てたりしも、此雪の日の夢ぞかし。

今さらに我が夫を恨らみんも果敢なし、都は花の見る目うるはしきに、深山木の我れ立ち並らぶ方なく、草木の冬と一人しりて、袖の涙に昔しを問へば、何ごとも総べて誤なりき、故郷の風の便りを聞けば、伯母君は我が上を歎げき歎げきて、其歳の秋かなしき数に入り給ひしとか、悔こそ物の終りなれ、今は浮世に何事も絶えぬ、つれなき人に操を守りて知られぬ節を保たんのみ、思へば誠と式部が歌の、ふれば憂さのみ増さる世を、知らじな雪の今歳も又、我が破れ垣をつくろひて、見よとや誇る我れは昔しの恋しき物を

(完)

青空文庫情報

底本：「新日本古典文学大系 明治編 24 樋口一葉集」岩波書店

2001（平成13）年10月15日第1刷発行

初出：「文学界 第三号」

1893（明治26）年3月31日

※括弧付きのルビは校注者が加えたものです。

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2007年8月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雪の日

樋口一葉

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>